

山田町まなびの時間

平成 24 年 4 月、みえ発！ボラパックⅡ第 3 便より、「被災地のことを知る時間」として実施してきたのが、「山田町まなびの時間」です。およそ 1 時間 30 分の「まなびの時間」では、山田町住民の方に「山田町まなびのガイド」として町を案内していただきながら、震災当時の体験、町の被害状況や復旧・復興の状況、ご自身の思いなどを語っていただきました。

平成 25 年 2 月、第 23 便からは、当時の様子や体験を聴くだけでなく、対話や交流に重きを置くように心がけました。山田町の方が、何を大切に思い、大災害に見舞われた今、何を支えに生きているのかを、同じ時間と空間を共有することで感じ取れるように配慮したつもりです。ガイドをお願いしたみなさんも、時間の経過とともに、ただ当時の状況を話すだけでなく、今後の災害に対する取り組みや考えなどをお話しいただける方もみえてきました。

一緒に「防災・減災について考える」時間を持たせたことで、これから起こるとされる災害にどのように備え、自分が何をすべきか考えるきっかけを得ることができたのではないのでしょうか。

「山田町まなびの時間」プログラム

※プログラムの設定は現地スタッフが担当。内容は便ごとに変まりました。

第 23 便 当時の体験と、女性の目から見た漁業復興
2. 8 三陸やまだ漁業協同組合 大浦女性部のみなさん

第 24 便 水産加工業の工場見学と産業復興について
2. 9 水産加工業経営 木村さん

第 25 便 薬剤師から見た東日本大震災
2. 23 薬剤師 内田さん

第 26 便 当時の避難所の状況について
3. 16 元小学校長 菊池さん

第 27 便 鯨と海の科学館見学と被災後の第三次産業の在り方
3. 29 鯨と海の科学館 専門指導員 道又さん

第 28 便 震災前・後の児童生徒のこころの変化
4. 27 元中学養護教諭 古川さん



第 24 便

NPO 法人 植える美 ing のみなさんが、水産加工業の現場を見学。産業復興への取り組みをまなびました。



第 27 便

大災害を乗り越えた鯨の骨格標本。鯨と海の科学館では、海の怖さと偉大さを知ることができました。



第 28 便

時には宿泊場所での開催も。大災害のあとの学校の様子や、子どもたちへの対応についてお話しいただきました。

「山田町まなびの時間」への声 第 26 便

三重県の大学に通う私は、よく友達に「山田町に行く理由」を聞かれる。理由は言葉で表せないから、友達を山田町に連れていく。友達は自然と山田町の人々の温かさを感じて笑顔になれる。人の温かさって言葉では表せないですよね。

震災で亡くなった方々の御冥福をお祈りするとともに、私たちを山田町の方々に出会わせてくれてありがとうございます。

また必ず山田に帰ります！！



第 26 便参加者 玉井隆至さん

あの、夢であってほしいと思う「未曾有の大災害」から、間もなく 3 年が経過しようとしています。この度は、当時の緊迫した状況、避難所運営の様子をお話しさせていただきましたことに感謝申し上げます。ご参加いただいた皆様は、どの方も真剣に耳を傾けていただきました。被災地を想う三重県の方々には「有難うございます」の言葉しか見つかりません。東北人、力を合わせて頑張りますので、これからも宜しくお願いします。



第 26 便ガイド 菊池清太さん

第 29 便 震災時の自身の体験と現状
5. 11 学習塾講師 竹内さん

第 30 便 座談会と文化交流
6. 29 三陸やまだ漁業協同組合 大浦女性部のみなさん

第 31 便 漁業・漁業施設の復旧、復興状況について
7. 13 大沢地区 漁師 大石さん

第 32 便 水産加工業の現状と
災害を乗り越えるために必要なこと
7. 20 水産加工業経営 木村さん

第 33 便 復興状況への私見とボランティアへの想い
8. 10 山田町議会議員 豊間根さん

第 34 便 これから起こる災害を生き抜くために
8. 30 元山田消防署副署長 三浦さん



第 30 便

大きな被害を受けた大浦地区の漁協女性部のみなさんとの座談会。山田町の風土・文化を感じることができました。



第 31 便

漁業を襲った大災害。地元の漁師さんに震災前・後の作業と生活の違いについてお話しいただきました。



第 34 便

三重県松阪市の中学生が、町内を回りながら、被害の大きさと、生き抜くための知識をまなびました。

第 35 便 見る、感じる、参加する、山田町の魂
復興山田がんばっぺし祭りを一緒に楽しむ
9. 15 山田祭りに関わるすべてのみなさん

ガイドの設定をしなかった第 35 便。ボラパックⅡ最終便は、山田の祭りを町の人たちと一緒に楽しんでいただくことを「まなびの時間」とさせていただきました。「盆や正月に帰郷しない人も、この祭りには必ず帰ってくる」と言われる山田の祭り。出展したブースを訪れた町の人との会話から、この祭りをどれほど楽しみにしていたかがわかります。郷土芸能や神輿の巡行を間近に見て、町の空気を肌で感じ、山田町の人々の魂、町の人々が誇りに思う文化にふれることができました。

祭りに参加するという、これまでの「まなびの時間」にはない体験をしていただけたのではないのでしょうか。



第 35 便

「山田町まなびの時間」への声 第 30 便

少しでも山田町の方々の心に寄り添った活動をしたい、そのために「まなびの時間」は、私にとってなくてはならないものでした。ともに生きてきた海に荒らされ、それでも、これからも海とともに生きていく。「生きる」ということの重さをこれほど強く感じたことはありませんでした。

この時間を通じて私がすべきことは、いざ来る災害時に「生き延びる力」を備えることだと感じています。大切な時間をありがとうございました。



第 30 便参加者 三浦洋子さん

みえボラのみなさんは、あまり多くのことを質問しませんでした。被災地のことや人の気持ちをしっかり考え、心に寄り添う活動をしているのが伝わってきました。できれば、みなさんには被災してほしくはありません。災害への危機感を日ごろから持つのは難しいことですが、常に災害のことを念頭に置いて、自分たちの、子どもたちの命を守ってほしいと思います。みえボラのみなさんの笑顔に感謝しています。



第 30 便ガイド 阿部秋子さん